

ふるさとへぐり再発見

はつかやま
弥生の村「廿日山」

2



平群谷の中央部分、初香台と若井・西宮・下垣内の間に小高い丘があります。ここは通称「廿日山」と呼ばれ、初香台団地の名称にもなっています。

この丘が、今から約2千年前に弥生時代の村として開かれたところで、奈良県、平群町の発掘調査で当時のことが少しずつ分かってきました。

廿日山は、南北600m、東西400mあり、周囲との比高差は約30mあります。

遺跡は、丘陵の南側より開かれたものとみられ、時代とともに北へ広がっていきます。

周囲の低湿地を中心に米を作り、山で狩りをして生活していました。

廿日山は中世に城館として利用されたため、かなり地形を変えられています。弥生時代の集落についても発掘調査で確認されつつあります。

図は、昭和61年の調査で見つかった竪穴式住居の跡で、8軒の家が重なりあって建てられていました。(S I は竪穴式住居の略称)

大きさは、4～6mぐらいあり、周りに溝を掘ったものもあります。床は土間で、藁わらや藁むしろを敷いた上で生活していたでしょう。

建てられた順番から、住居は、平面の形が円形から隅丸方形に、そして方形へと変化していきます。

これは、弥生時代中期から後期にかけて(2～3世紀)の近畿地方での特徴です。

廿日山遺跡の全容はまだ分かりませんが、調査が進めば当時の村の人口も推定できるようになるでしょう。

▶ 廿日山遺跡、竪穴式住居復元図

